

武蔵野日曜聖書講筵

曠野の靈闘 ——キリストとサタンの一騎打

——マタイ伝第4章1〜11節——

1971年9月5日

小池辰雄

「至誠」とは「止むに止まれず」二十年間の祈り「試み」でなく「一騎打」四十日四十夜の断食で得たもの パンの問題 神の言 生命の言 御霊のバプテスマ なんじ若し神の子ならば 眞の宗教はご利益にあらず 愛とは自分を献げること 悪の幕屋 サタンの配下 サタンよ、退け！ 根っこの世界が宗教 キリストに属く キリストに在って

【マタイ4】

1ここにイエス御霊によりて荒野に導かれ給う、悪魔に試みられんと為るなり。2四十日、四十夜、断食して、後に飢えたもう。3試むる者きたりて言う『なんじ若し神の子ならば、命じて此等の石をパンと為らしめよ』4答えて言い給う『人の生くるはパンのみに由るにあらず、神の口より出する凡ての言に由る』と録されたり』5ここに悪魔イエスを聖なる都につれゆき、宮の頂上に立たせて言う、6『なんじ若し神の子ならば己が身を下に投げよ。それは「なんじの為に御使たちに命じ給わん。彼ら手にて汝を支え、その足を石にうち当つること勿らしめん」と録されたるなり』7イエス言いたもう『主なる汝の神を試むべからず』と、また録されたり』8悪魔またイエスを最高き山につれゆき、世のもろもろの国と、その栄華とを示して言う、9『なんじ若し平伏して我を拜せば、此等を皆なんじに与えん』10ここにイエス言給う『サタンよ、退け』主なる汝の神を拜し、ただ之にのみ事え奉るべし』と録されたるなり』11ここに悪魔は離れ去り、視よ、御使たち来り事えぬ。

●「至誠」とは「止むに止まれず」

「孟子曰わく、万物皆我に備わる。身を反みて誠ならば、楽しみ焉より大なるは莫し。強恕して行わば、仁を求むる焉より近きはなし」(『孟子』尽心章句 上)

という言葉がある。「万物みな我に備わる」なんていうのは、普通の道徳の世界では言えない。孟子のほうに孔子よりでつかいかも知れないな。「万物」とは、森羅万象、大宇宙、大自然。

「万理は即ち一理なり」

という。大自然を見て、それと一如の境地になっていくと、



「万物皆我に備わる」

という境地になる。パウロはこの境地に行ってますよ。

「万ずのものはすべて我がものである」

と、パウロの書簡の中にある。パウロやヨハネは、ちゃんとこういうところに行っている。本当にキリストを得ると、キリストは宇宙的なキリストですから、そういう境地に入ってしまう。福音というのは東西古今の真理をみな包摂してしまう。究極の真理は万人に共通である。

「身を反みて誠ならば」

は、本当は「反みて」なんて言わなくていい。本当の世界は「省みる」世界ではないから。「省みて誠」なんていうのは本当はちよつと「誠」ではないかも知れない。本当の「誠」は自然なんだから。反省されて屈折している世界ではない。

「誠」というのは、私に言わせれば、私心がないこと、無私、無ということです。

「楽しみ焉より大なるは莫し」

自分を偽らないでそのまま、バツとやっている世界、それが一番楽な境地です。策略を弄したり、どうのこうのとやっているうちは、本当の「至誠」の世界ではない。「至誠」という言葉は『言志録』にも出てくる、西郷南洲が大好きな言葉です。

「雨は止むに止まれずして降り

「風は止むに止まれずして吹き」

という、止むに止まれずして動いている姿が「至誠」である。風が吹くと、止むに止まれずして木の葉は動く。そういうのが「誠」というんです。なにか、気をと澄まして、

「真実、真実」

と言っているのはひとつも「真実」ではない。

そうすれば、

「楽しみ焉より大なるは莫し。強恕して行わば」

と。「強恕」とは、「強く人の心を慮ること」、「人の境地をよく思いやることです。思い遣りの心。深く人を思いやって行なうならば、

「仁を求むる焉より近きはなし」

一番、仁への近道は人のために人を本当に思いやってやることだと。この頃は自分勝手な人が多いが、そういうのは全然これとは違う。

●二十年間の祈り

今日の話は、普通「荒野の試み」と言われているんですが、「曠野の靈闘」——副題として、「キリストとサタンの一騎打」——と題しました。

イエスがヨルダンでバプテスマのヨハネから洗礼を受けた。このイエスの洗礼は、聖霊



のバプテスマです。即ち、イエスにとっての「聖霊降臨」はあのヨルダンであったわけですが、もちろん、イエスは生まれつき聖霊に非常に恵まれた方でありますが、ヨルダンの前に準備がもちろんあった。それだけの生涯の、30年の準備があったわけです。12歳のイエスが「お父さん」と言つて意識していたのは、天の父のことなんです。「私がお父さんのことにたずさわっていて、何が悪いか」というようなわけで。

それから約20年間、一番大事なことは、イエスは祈られたことです。特に山に籠もつて祈られた。これは書いてないけれども、憶測して間違いないと思います。シナゴウグで聞いている旧約聖書の中身は、そのように自然において祈つて、咀嚼そじやくされておられたわけでしょう。だから、聖霊降臨の体験の下準備はもうちゃんとできていたわけです。それではつきりとひとつのカイロスを迎えて時が満ちて、そして聖霊体験をはつきりとなさつて、聖霊の人として立ち上がる。伝道に乗り出す前に。それができてなかつたら、伝道なんかできらるものではない。

●「試み」でなく「一騎打」

しかし、それだけではまだ足りなかつた。もう一つ、仕事がある。それはサタンとの一騎打であつた。サタンとの一騎打は、キリストの決定的な勝利です。決定的な勝利をしなかつたら、キリストは出かけない。その点ではすべての伝道者は落第です。イエスだけが及第する。どんな伝道者でも、サタンとの一騎打では勝てない。だから、決定的な決戦だね、この決戦は「関ヶ原」どころではない。黙示録に「ハルマゲドンの決戦」がありますが、そのようなハルマゲドンです。イエスにとっては、まさに——我々の言葉で言う——関ヶ原なんです。

それなのに、「荒野の試み」と言う。聖書の中にも「試みられる」というように書いてある。まあ、一面はそうでしょう。けれども、私は、「キリストが試みられる」というような言い方は感心しない。試みるのはサタンです。サタンが「イエスはどうか」と試みるなら、サタンのほうが上だよ。サタンが上で、イエスが試みられるなんて、そんなものかね。私はちよつとそれが気に入らないから、そこで、「曠野の靈闘」とした。

「荒野の試み」などと言っているけれども、聖霊は悪霊に対しては絶対不敗であります。残念ながら、聖霊をいただいている人間そのものは決して絶対不敗ではない。しかし、聖霊は不敗です。神・聖霊はサタンに対しては決して負けない霊であります。私たちがすらも、本当に聖霊をいただいている時には何ともいえない平安がある。何も恐くない。それが即ち、この聖霊が勝利の霊であるからです。

イエス自身は、私たちと同じ危機的存在です。その点では、試みられるだけの存在なんです。けれども、イエスが聖霊のバプテスマをヨルダンで受けられて立ち上がった。そして、イエスは御霊に導かれて荒野に行かれた。サタンに誘いざなわれて行ったのではない。



「ここにイエス御霊みたまによりて荒野あらのに導かれ給うたま、悪魔に試みられんと為すなり。」

と書いてあるとおりです。荒野に行かれて、何をされたかというのと、断食の祈りです。即ち、聖霊降臨をもつと身固めするために。聖霊が本当に内住して、そして、徹底的に霊人となる。そこで、サタンがやって来れば、実は逆にサタンがキリストに試みられるわけだ。正直、見ていると、サタンが試みられてしまつて、サタンは負けてしまつた。キリストが試みられたのではないんだ。サタンのほうがむしろ試されてしまつたわけです。そういう結果になつた。だから、私は「靈闘」「一騎打」と言いたい。

我々人間においては、聖霊を宿していようが、私たちは罪びとであるので、弱いです。聖霊があるからといって、いい気になつていようと、ヘタすると、ストーンとひつくり返される。それはサタンはなかなか詭弁きべんを弄ろうするし、奸策かんさくを弄ろうするし、あるいは甘言かんげんでやつて来るし、あるいは巧みな知恵でやつて来たり、いろいろな誘惑をもつて臨んで来る。我々は、ヘタすると、それにひつかかる。だから、「御霊の体験をした」なんて、いい気になつていゝるわけにいかない。マルチン・ルターが言っている通り、

「クリスチャンの生涯は死に至るまで、回心また回心である。転回また転回して向かつて行くんだ」

ということ。回心が前進ですよ。心を神・キリストに向かつてめぐらすことが即ち前進である。

あの手この手で私たちはやられるわけです。サタンに試みられる。サタンの子分みたいな、メフェイストーフエレスみたいなものに、ファウストはさんざんやつつけられて、サタンに籠絡ろうらくされる。これはゲーテが書いている通りです。

●四十日四十夜の断食で得たもの

②四十日、四十夜、断食して、後に飢えたもう。

しかし、イエスにとつてもこの靈闘なまやぶは生易なまやしいものではない。彼が断食して四十日四十夜。かくして飢餓の極致にきた。四十日となつたら、飢えの極致です。四十日四十夜、荒野で誰もいない所で昼も夜も。特に夜はその孤独に耐えられるかね。孤独せきりよう、寂寥せきりよう。ヘタすると、強盗がやつてくる。猛獣がやつてくる。ヘビやサソリが近寄つてくる。雨も降るだろうし、風がまき起ころるだろうし、大変ですよ、「四十日四十夜」と一言で言つたつて。それこそ、心身が脅かされるわけだ。空腹で体力は肉体的には弱つてくるし。非常に危機的なことです。しかし、その四十日四十夜でキリストは一体、何を得ているか。これは神さまです。祈りの世界で神さまと一つになつている。いよいよ神と一如いちじよになつていく。神と一如。イエスにとつては、

「神は、父はわが骨の骨、肉の肉、霊の霊である」



こういう境地を、この四十日四十夜の断食で、キリストは食い込んでいったと思う。それでなければサタンに勝てないから。

「我と父とは一つなり」(ヨハネ10・30)

というヨハネ伝の言葉が現実になつていたと思います。

●パンの問題

すると、断食が満期となったならば、やって来たのが「試みる者」というやつです。「試みる者」と聖書に書いてある。これはサタンです。まあ、聖書に書いてあるからしかたがない、「試みる者」という言葉があるから。そして、言うのには、

3 試みる者きたりて言う『なんじ若し神の子ならば、命じて此等の石をパンと為らしめよ』

「もうお腹がへって、これ以上断食したら、死にますよ。神の子なら、これらの石をパンにしたらいいでしよう」

と。向こうの石ころはちよつとパンみたいな形をしている。そこらにゴロゴロしているからね。キリストにも、うっかりすると、パンに見えたりする。かじったら、大変だ。

人間の一番の問題は、いつもやっている「何々闘争」、要するにみんな「パン」の問題だ。賃金が足りないとか何とか。「賃金」と言つたつて、お金が欲しいわけではなく、お金が足りない、食えないからというわけだ。要するに、毎日の生活問題というのが一番、切実なものだ。人間は、この肉体が生きるためには、「飲まざるべからず、食わざるべからず」というわけだから、これはしょうがない。最もこれは要求しているものだ。サタンはその問題で先ずやってきたわけだ。やはり、サタンの攻撃はなかなか深刻なものです。しかし、

「日用の糧を今日も与えてください」(マタイ6・11)

と、「主の祈り」の中にもあります。だから決して、イエスはパンの問題をいい加減にしてる観念主義者ではない。イエスもちろん現実をしつかり踏まえていらつしやるわけです。

「毎日の食事のことを、どうぞ欠かさなないようにしていただきたいと祈りなさい」と、主の祈りの中にあるのだからね。

そういうキリストに向かつて言ってきたのが、パンの問題、要するに生活問題です。もうひとつ別な言葉で言うと、経済問題です。生活・経済の問題をもつて迫つて来たわけですから、悪の親玉のサタンですから。

●神の言

そうしたら、イエスは、

4 答えて言い給う『人の生くるはパンのみに由るにあらず、神の口より出ず』



る凡ての言ことばに由る」と録しるされたり』

パンもそれは問題だろうと。

「神の口より出ずる凡ての言ことばに由る」

という言葉がなかなか身につかない、みんな読んでいて。

「聖書の言葉にあるから、まあ、そうだろう」

くらしいところでおしまいだ。これは申命記8章3節の言葉です。

肉体は、言うまでもなく、「パン」を必要とします。しかし、私たちの魂はパンではどうにもならん。ここを忘れていているわけです。

「パンでお腹が満ちれば魂もよくなる」

と思っているんだ、マルクス主義なんてのは。それはとんでもない欠陥です。魂、心の世界はパンでは生きない。魂の世界のパンは、これは「神の言ことば」である。

「へえー、言葉がそうでしょうかね」

なんて、ちよつと首をひねるんだね。「言」というと、みんな「意味」だと思うから、そういうところで躓つまづいてしまう。人間は言葉を語って、その意味はどうだと、いつも意味を考えている。解釈ばかり。聖書学にも解釈学というのがある。神の言ことばというものは、解釈ではないんですよ。キリストが言っているではないですか、

「我が言は靈なり、生命なり」(ヨハネ6・63)

と。キリストの言を本当に靈とし、生命として受けとれるようになるまでは、聖書は絶対にわからん。はつきり言っておきます。聖書は、いくら註解書を読もうが、あるいは勉強して書こうが、みんなそれは空しい。使徒たちは、とりわけパウロは本当に本当にキリストの言を食らって靈として生きていたか、そこから発している言であるか。

神の言は即ち靈であり、生命である。だから、靈と言とは分かつことができない。いや、実に「一つである」と言っている。靈即言、言即靈と言う。そのように、活かす言、私たちの魂を活かす言です。

自然でもそうだよ。自然を見て、リンゴを見て、

「あのリンゴはおいしそうだな」

と。リンゴは食べなければお腹は一杯にならないさ。けれども、リンゴを見ていて、本当にリンゴと一つになったら、その見ることによつて食らっているんだ。冗談にもあるけれども、鰻屋うなぎの所へ行つて匂いをかきながら御飯を食べようと。鰻は買わなくても、お腹は一杯になったなんて。そういうことで、すべて身体からだに應えてこなくては。心身しんしんというのがまた一つですから。

魂が本当に神の言で生きてくると、普通の肉体が四十日断食していても、それでも、何か知らんけれども、生命がある。神の言は、それによつて魂が生きるということとは、肉体が生きる以上に特に大事な生命を持っている。そのことが普段すっかり忘れられているわ



けです。だから、何でもすぐ、経済問題が先に立つ。

「魂のことを言うのは、それは観念だ」

と。それは観念的に思っているから、観念にすぎないのであって、実は最も根源の具体的なことです。最も根源の具体で、魂の生命があつてこそ初めて、今度は、肉体に受けるところの食物が本当に消化される。その主従の関係が間違っているのが一般であります。教育とか、道徳とか言つたつて、みんなそれはかなり観念的にずれてしまつている。

●生命の言

どうしたつて、聖書にはみんなかなわないでしょ。なぜ、どんな哲学も道徳も聖書にかなわないかというところ、聖書はそういった力を持つている、生命を持つている世界だからです。聖書の言は意味の言葉ではないんだから。生命の言いのちことばなんだ。それを生命として受けとらないうで、意味として一生懸命に、いわゆる神学的に解剖したりする。本当の神学は神学をあざける。

そういうわけで、キリストは、魂が糧かて中の糧を、一番大事な糧を荒野で食べている。だから、「人の生くるのはパンだけではない。神のすべての言によつて、神の言を全的に受けとることによつて生きるのだ」

と。こつちのほうが生命にとつては大事なんだ。みんな普通は「生ける屍しかばね」でいざるぞ、というわけだ。パンを食べて太つているのは生ける屍だと。

霊が中心であつて、身体は衣であります。そういった人間の構造はもちろん霊肉渾然こんぜんとして、分かつことができないけれども、肉体がパンを必要とするその切実性よりも、魂が霊を、神の言を必要とする切実性のほうがもつと深いものであることを、みんな忘れてしまつている。ここに神の言を聞く饑饉さきんがある。みんな本当は飢えてるんだ。飢えているのに、その飢えを知らない。魂の糧に飢えていくくせに、その飢えている自分の度合いを知らないという情けない状態で普通はあるということなんです。それが普通の人間の通常性なんです。肉体への必要性よりも、魂へのもつと深刻な必要性を知らないでいる。これを通常性というんだ。だから、魂は痩せ細つている。しかし、それを意識していない。これが神から離れた人間一般の原罪性という。神から離れているから、そういうことになる。原罪性はそのういうところにある。

だから、イエスが「神の言ことば」と言うときには、絶対に言葉の意味を言つていてるのではない。

内実を指している。私たちは、ヨハネ伝6章63節の

「我が言は霊なり、生命なり」

を絶対に忘れてはいかん。記憶したつてダメですよ、身につけなければ。聖書の中でポイントをついている句ははつきりとお腹に入れておかなければ。そうしたら、楽な人になりますよ。



●御霊のバプテスマ

ところが、

「どうしたら、神の言は生命だとか霊だとか、そういうことが掴めるんですか」と。それは本当に聖霊を受けるまでは掴めない。御霊のバプテスマを受けるまでは、

「神の言は霊なり、生命なり」

ということが直かに来ないんです。

「そうかも知れないな」

くらいなところでは。考えて想像して、「そうらしいな」くらいのところでは。「らしいな」どころの騒ぎではない。御霊のバプテスマというのがいかに重要かということです。しかし、御霊のバプテスマというのは、いろいろな道を通して来ます。使徒行伝では聖霊の人、パウロやペテロやヨハネが按手をすれば、聖霊を受ける。もちろん、そうです。

けれども、内村先生ですら、

「まあ、使徒たちはそんなことをしたろう」

と、そのところはまだ希薄です。先生自身がそれをなさらない。そこが無教会の欠陥です。もしそうだったなら、無教会はこんなもんじゃないですよ。内村、藤井、塚本と、みんな一流の先生方だけでも、私が言う通り、パウロ・ヨハネ・ペテロのこの使徒たちに比べたら次元が違います。私がそう言うと、みんなは

「生意気だ」

なんて言うけれども、本当だから仕方がない。あなた方は、この聖霊の権威においては、絶対に負けてはいかん。神学者が何であろうが、そんなものは相手にならない。

パンは肉体を一時的に、地上的生命をして在らしめているけれども、魂が受けるところの聖霊は私たちに「永遠の生命」を与えている。永遠の生命であるところの「神の言」という糧、聖霊という事態、そこからずれてしまっているのが20世紀のキリスト教です。もちろん、そうでない方々があります。キリスト教の歴史はただそういう人たちによってのみ本当に継がれている。あとは神の歴史の中では消えて行ってしまふ。神の歴史に残るものはそういう本ものだけです。

哲学も倫理も政治も——「政治、政治」と騒いでいるけれども——およそ人間の思想はどんなに立派そうにみえても、魂を生かすことも救うこともできません。

キリストはこのサタンに対して、

「神の言ことばによってこそ本当に生きるんだ。パンの糧も大事だろう。けれども、違うんだ」

と言って、石ころをパンにしなかった。そんなことを神様にお願いしなかった。彼の肉体は断食のために飢えていても、彼の霊はこの四十日四十夜を通して、神の霊で飽き足りていた。神の霊で豊満していたわけだ。神の霊を、聖言を食らっているから。もの凄い活力



をキリストは持つているから、サタンなんていうやつは一撃のもとにやつつけられた。一言のもとにサタンを撃退しました。こういう勝利はキリストでなければできない。

●なんじ若し神の子ならば

⁵ここに悪魔イエスを聖なる都につれゆき、宮の頂上いただきに立たせて言う、

ところが、サタンはなおも屈せずして、今度はイエスを神の都エルサレムにつれて行った。これは霊で連れて行くんですよ、肉体が行ったわけじゃない。このことは旧約のエゼキエル書37章を見てもわかる。あの枯骨かれほねの谷へエゼキエルは霊で連れて行かれた。肉体はその時、ちよつともぬけの殻みたいになるんだな。

霊において案内した。そして、神殿の頂上にイエスを立たせた。イエスは、もうサタンがすることは見えているんだ。けれども、イエスはちゃんとその時はサタンの言うなりに従って行った。

「お前のすることはわかってるよ」

と、イエスは言いたかったんだろうけれども。サタンは案内して行って、今度はやつつけられると思つて、大いに鼻高々になっていたのかも知れない。神殿の頂上にイエスを立たせた。そこまでは、イエスは言うなりになっていたけれども、どっこいというわけだ。サタンは、何を言うかと思つたら、

6『なんじ若し神の子ならばおの己が身を下に投げよ。それは「なんじのために御使みつかいたちに命じ給わん。彼ら手にて汝を支えささ、その足を石にうち当つること勿ならしめん」と録しるされたるなり』

これは詩篇91篇の11節、12節です。

「あなたがもし神の子ならば、ご自分の身を下に投げてごらんなさい。御使が来てパツと手で支えて、身を投げても石にぶつかつて身が折れたりすることがありませんから、ひとつやつてごらんなさい。ちゃんと、聖書に書いてあるじゃないですか。やつたらいいでしょう」

と、今度は聖言をもつて、聖句を引用して勧誘して来たわけだ。

「ああ、聖書の言葉か」

なんて、感心したらダメですよ。聖書の言葉といえども、時と場合とによりまして――一番大事なのは聖句に対するところの、その当事者の心の態度によつて――その真理性が失われてしまう。

「聖句だから何でもいい」

なんていうのは、それはパウロが言つた

「儀文は殺し、霊は活かす」

ということですよ。あるいは、聖句を律法化している。サタンは巧妙にそのようにやつてきた。



真理性が失われるどころでない。時に、聖言が有害になる。聖句というものはちようど、正宗の名刀みたいなものだ。神の言は正宗の名刀の如し、両刃の剣の如し。執る人の魂の在り方でもって自分を害ってしまう。その名刀を執る人の魂の在り方で、神の言が逆に害う。

●真の宗教はご利益にあらざ

この場合のサタンはどういう心ですか。ご利益信仰、いわゆる奇蹟信仰です。そういう角度です。真の信仰、真の宗教はご利益にあらざ、觀念にあらざ、パリサイにあらざ、傍觀にあらざ、靈的傲慢にあらざ、ということ。いいですか、これは忘れないように。本当の宗教はご利益ではありません。觀念でもありません。パリサイではありません。傍觀して、どうのこうのと言っているわけでもありません。靈的傲慢でもない。

「私は大いに聖靈を受けた」

と言って、聖靈を私すると、今度はサタンになる。そういう靈的傲慢でもない。私たちは、
「本当の使徒的信仰の中道を行こう」

と言うんだ。本当の中央道。中央突破だ。「中」というのは素晴らしい言葉です。これは「上中下」の中ではないよ。「中」というのは円を貫いているんだ。「円」は円現です。円現を貫いている。地軸がそうじゃないですか。地軸をもった地球の姿は「中」という字です。

7 イエス言いたもう『主なる汝の神を試むべからず』と、また録されたり』

イエスはサタンのその勧誘に対して、

「そんなご利益信仰ではダメだ。神さまを試してはいかん。神さまを試したらとんでもない話だ」
と答えた。

「自分は大いぶ聖靈をいただいているし、神さまは助けてくれるだろうから」
なんて思って、試してはいかん。そうしたら、さっきの名刀ではないが、怪我をする。

『主なる汝の神を試むべからず』とあるではないか

と反撃された。これは聖書の中にはつきり、そういう言葉が出てくるわけではないけれども、旧約の中からキリストはもちろんそれを言われた。神の力を試したりすることは、どういう心の角度かという、自己本位、ご利益です。さっきは経済問題だったが、これは宗教問題です。キリストの宗教はそんなものではない。ひたすら神の意思にこれ従う聖意体现の角度です。そのことは積極的にそこでは言っておられないけれども、そのあとの方にそれが出てきます。

キリスト教とは何ぞや。

「汝の御意をなされたまえ」

という宗教だ。「神さまの意思を成させたまえ」というのは、これは傍觀しているのではない。自分を提身して体现する。全存在をもつて神の聖意を現わす。自分を提身すること。献供



すること、献げること。これがイエスの宗教であります。親鸞の信仰がそうです。

「たとえば地獄に落ちても、たとえ神に棄てられても、神の意思が成るなら、救われなくてもいい」

という信仰なんだ。

「神の意思がそこにあるならば、自分は地獄へ落ちてもいい」

というのが本当の信仰だ。「救い、救い」と言うけれども、救いのための信仰では本当はない。

「神の意思が成ることだけだ」

という、そういうった徹底的な無、砕け、というものは、神さまは棄てない。

●愛とは自分を献げること

それは何かというと、要するに愛なんです。私は、『ゲーテの晩年の宗教性』のところで

「愛は愛である」

と書いた。あの言葉でもう躓いている人がいる。

愛は愛である。恋愛であろうと、夫婦愛であろうと、友人の愛であろうと、また、君臣の間の愛であろうと、神さまと自分との関係の愛であろうと、みんな愛は愛で一貫している。

「愛にはエロースとアガペーがあるじゃないですか」

なんて。ああ、あるよ。けれども、本当の世界は「エロースとアガペー」なんていうものを分析しているようなものではない。

本当の愛というのは、私に言わせれば、自分を献げるのが本当の愛なんだ。愛には、それは分析すれば、いろいろな愛があるでしょうけれども、私が言うところの本当の愛というのは自己を献げること。恋人のためには自分は死んでもいいというくらい愛が、恋愛なら本当の恋愛です。それから夫婦愛もそうだ。友情関係でも

「兎頸の交わり」

という言葉もあるように、その人のためには首を切られても悔いはないという、命懸けの友情なんです。それから、赤穂浪士の四十七士で言うまでもなく、主君のためにはと云って、命懸けの仇討ちあだうをした。仇討ちそのものもいいとか悪いとか、そういうことではない。それはみな一貫している。本当の世界は一つを以て貫いている世界です。

まあ、そんなことを私がいずれ『無の神学』でもって言いだしたら、四方八方から何か言われるでしょうが、一向差し支えない。それはそうじゃないですか、旧約聖書の雅歌書を読んでごらん。雅歌書の愛というのはそういう角度の愛だからね。

イエスの信仰はまったく神本位、神一切でありまして、私心がない。

「神を試す」

なんてこととは違う。およそサタンのご利益信仰とは違う。だから、イエスは本当に無者である。ひたすら神意を承り、ただこれに信従することあるのみである。神の意思の発動



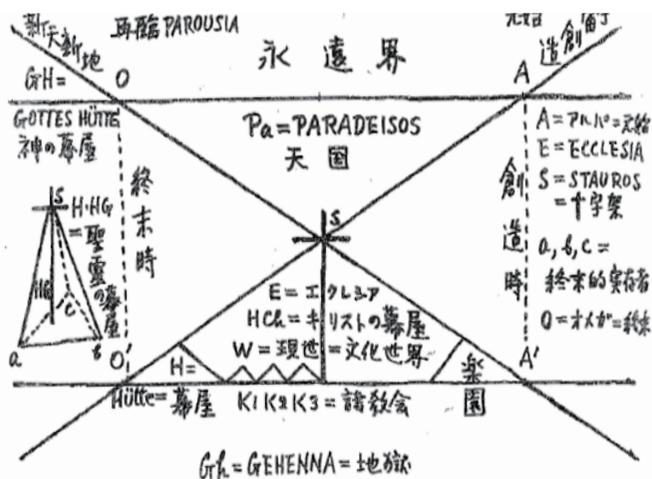
するとところ、そこに靈法が働きます。聖霊の中に自由に乗っかっていくから、本当の力がそこに現われる。そうすると、普通の人には奇蹟と思われることが現われる。しかし、それは奇蹟ではない。ちゃんと靈法が働いている世界です。いわゆる民間信仰ではありません。キリストは湖の上を渡って行った。これはもう完全に靈法が働いている世界です。靈法は本当に神の力を宿していますから。法が単なる法として考えられているのではない。「法」という字は水が去ると書く。水は低きに去っていく。これを「自然」という。これは自然の姿です。自然の姿を「法」というんだから、これは素晴らしい言葉です。法が既に自然を表わしているんだ。

●悪の幕屋

それで、サタンは二度敗れました。再度敗れたサタンは、三度目には勝ってやろうと大いに意気込んで、今度は最もサタンらしい問いをかけてきた。最もサタンらしいとはどういうことですか。サタンの最もサタンらしい性格というのは傲慢だ。これはサタンの一番の本質です。一番の本質が表われている今度の試み、今度のサタンの攻撃に勝ったらサタンは完敗というわけです。三度目に完敗してしまふ。

悪魔またイエスを最高き山につれゆき、世のもろもろの国と、その榮華とを示して言う、⁹『なんじ若し平伏して我を拜せば、此等を皆なんじに与えん』

即ち、サタンはイエスを靈において、今度は非常に高い山に連れて行った。高い所は気持がいいからね。うっかりすると、乗っかってしまふわけだ。サタンは「この世の君」で、この世に君臨している。



私はこういう図を書いたでしょ。この世を幕屋の形で表わすと、三角錐体です。これがひっくり返ると、これはパラダイスの世界です。この世をサタンが一応、今、支配している。20世紀なんていうのはサタンの霊が支配して困っている。教育界なんかもサタンの霊が随分がある。けれども、このサタンの霊の世界に十字架が立っている。だから、滅びないんです。キリストの十字架が立っているから。この十字架という門を通って天国に行く。これがパラダイスの世界です。これは仮天国だよ。それから、最後の審判の時がくる。それからこつちが本天国、新天新地の世界です。こつちは本地獄、ゲヘナです。これは仮地獄で大きいんだ。こつちは小さいけれども。そしてこつちは無限にでっかい。そういうような図を私は書いたわけです（小池辰雄著作集第三卷『無の神学』374頁参照）。これが、サタンと



「この世の君が君臨している悪の幕屋（詩篇84・10）」という。

●サタンの配下

権力を持つとあぶないんだ。ヘタするとサタンの配下に入る。政府なんていうのはよっぽど気をつけないといけない。サタンの支配下になっているのが、この世の政治家、大方の政治家がそうです。これは黙示録にも出ている。この世の権力者はみんなサタンの支配下にある。

そこで、この世の諸々の国の栄耀栄華を、素晴らしい文化文明を見せて、

「あなたがもし平伏して私に拝跪するならば、これらすべてをあなたに上げますぞ」

と。これは最もサタンらしい言葉なんです。「私に跪け」と。サタンは悪の権力をそこで振る舞ったわけだ。そして、

「これはみんな俺の配下なんだぞ、世界の文明文化はみんな俺の配下だ」

と。公害やなんかが生じたのはみんなそういうところから発している。要するに、本当にお互いに思いやって、また信頼し合っている世界ではないものだから。

果たせるかな、サタンは神の統治下にあるところの全世界を横取りして、世界に君臨しているところの悪霊の首魁であるから、政治的問題を持つてきたわけです。問題は今度は、政治の問題。経済、宗教、政治ときたわけだ。だから、政治の世界が一番恐ろしいんですよ。悪に染まりやすい世界だから。世界に戦争が絶えない国際関係も、みんなこれは政治家が武力と一緒になっている。政治的権勢の問題、要するに政治問題をもつてサタンはイエスに迫ったわけです。

現に世界は諸々の権勢の、闘争の場であります。地上はおろか、制空権、制海権をどうして取ろうかと、今はもう制海中権だ。海の中で今度は始まっている。海の中の資源を取り合います。月にもし、もの凄い資源があつたら、これもまた取り合いになる。何と言つたつて、政治と経済は離すことはできませんけれども。地上はおろか、制空権、制海権――地上ではいつも領土でもつてやっている――海底権までに及ぼうとしている。権勢のことは人類の歴史とともに古く、人類の歴史とともに続く。争いは歴史の終末まで続きます。イデオロギーと経済力と武力がこの権勢と不可離の關係を持っています。権勢欲はサタンの根本衝動であります。だから、権勢欲がきたら、これはもうサタンの欲であります。本当の権威は必ず愛を伴っているわけですけども、その愛がないから。聖書的権威は愛を持っていますけれども、サタンのものとはそうではない。みんなこれを自分のものとしようとしている。この世の中ばかりではない。今度は、神の座を横取りして、全世界に君臨しようとするのが、サタンの目的である。もし、このサタンの権勢欲が人類をして核兵器を行かせしめんか、20世紀の世界は壊滅する。これがサタンの人類壊滅への意図であります。

しかし、たといそのようなことになつても、神の人類救済はそれで挫けるものではありません。



せん。「遣れる民」がある。全世界は、たとえサタンの勢力のために酷いことになっても、神の遣れる民、第三の人類、靈的な人類、み霊の使徒たちは、この新天新地の中に迎えられるわけです。ですから、聖書は言っているんだ、必ず最後には大変動が来ると。天変地異、また大変な戦争になる。これはキリストも預言している。歴史の終末にあつて、最後に大審判の日が来て、キリストの再臨が来て、それから、その新天新地が迎えられるという段取りは黙示録が提示している通りです。

しかし、このような終末がどのような様相で来るかは、何ぴとも予測することも預言することもできません。ただ神のみぞ知りたもう。

●サタンよ、退け！

「あなたがもし平伏して私に拝跪するなら」

という、このサタンの一言に、もしキリストが負けたならば、私たちに救いはないし、世界には望みがない。だから、この最後のサタンの一言との戦いは、天地がひっくり返るかという大闘争であるわけです。これは「荒野の試み」なんていう小さなものではない。靈闘、キリストとサタンとの一騎打です。

このサタンの一言は非常に有毒な決定的な挑戦を含んだ奸言かんげんである。

「もし、私に平伏して拝むなら、全部やろう」

なんて、ご褒美をもちだして言っている悪巧みの言葉なんだ。たとえば、キリストが全世界を受けても、サタンの配下になったら、どうするんですか。結局それはサタンだ。これこそ本当の関ヶ原であり、ハルマゲドンの戦いよりも重い歴史的な決戦です。人類の救済如何はまさにこの一言に勝つか負けるかにかかっていた。

もし、サタンのこの言を容れるならば、神の子、聖霊の人が、サタンに事実上屈伏することになるから、これほどキリストを侮辱した言葉はない。たとい全世界を与えられても、全世界に君臨するサタンの配下になることが神の子の道であるか。これほどキリストを馬鹿にした言葉は実はない。権勢が何か。政治とは権勢のからくりか。キリストのバシレイア（統治）はそんなものではない。イエスは聖憤措おく能あたわず、激怒して大喝なされた。

「サタンよ、退け！」

と。この時はキリストは大喝された。始めの二つはどれくらい程度の声だったか知らんけれども、三番目はキリストは、これは完全に大喝した。もう、サタンは震えて行ってしまったらうと思う。しかも、キリストは何と仰ったかというところ、「我は聖霊の人なり」なんて、そんなことは仰らない。

『主なる汝の神を拜し、ただこれにのみ事つかえ奉るべし』（申命記6・13）と書いてある」

と仰った。キリストは靈闘をなさるために、聖霊を私しない。聖霊充滿の人でありながら、



「ただ神にのみ仕えよ。聖意に従え」

と。これがキリストが十字架の死に至るまで従ったゆえんです。

私たちは具体的にこのキリストに——私たちは罪びとですから——私たちを救ってくださったこのキリストにのみ仕える。キリストの前にのみ平伏す。だから、私はどうしても

「主よ！」

と祈らざるを得ない。キリストを飛び越えて、直接に「父よ！」とは言わない。いいんですよ、言ったって。そう祈れと書いてあるから、いいんだけれども。キリストはそう仰ったけれども、私としてはどうも……。いや、皆さんはいくらでも「父よ」と祈っていいですよ。けれども、私はこの頃、「主よ！」ばかりになってしまった。そのうちにまた「父よ」になるかも知りませんけれども。とにかく、「主さま！」というわけです。私はキリストでなければ、やりきれんやつだから。

キリストの拝跪し給う者は、神のみである。神にのみ仕え奉るのがキリストの在り方です。自分で判断したり、自分でものを言ったり、自分でしたりしていたのではない。

「みんな、これは私がしているのではない。神さまがさせている。私が言っているのではない。神が言わせているんだ」

と、ヨハネ伝に書いてある。「善き先生」と言われたら、

「なぜ、私のことを善きというか。神さまの他に善いものはない」

と仰った。

●根つこの世界が宗教

「天国」という言葉は、

「バシレイア トゥー テウー」「神の国」

という言葉です。神の統治し給うところ、神の意思の行なわれるところです。「統治」というと、すぐいわゆる政治だと思ふからいかん。統^すべ治めるといふのは、神の意思がそこに行なわれることが本当の統治だ。だから、政治家は、神・キリストを受けとるような、あるいは仏教で言うなら仏の霊を生きているような、そういう人たちが本当の政治家になれる。政治と宗教とをただいきなり概念的にそこに並べて言うのではない。なにも政治に限らない。芸術でも、学問でも何でもみんなそうです。

「奥に本当の世界をもたなければ、その政治も芸術も学問も本当の花は咲きません」

という話。だから、私がいとも言っている通り、宗教と文化は根つこと幹枝葉の関係であって、根つこの世界が宗教です。根つこが生きていかなかったなら、みんなぶつ倒れてしまう。

●キリストに属く

この現世がどれほどサタンの勢力の下にありましても、到るところ、神の手は働きます。



神の声は響いております。神さまは遍在し給う。いついかなる所におきましても、私たちはキリストに出会うことができる。その意味においては、実はキリストが本当に支配しておられる。サタンは横取りしたような顔をしているけれども、闇の世界に実はもうひとつ凄い光がちゃんと来ている。この光を受けなくては、この声に聞かなくては。この手に触れなくては。だから、問題は一つである。

「人間の自由はただ一つのことだけ。このサタンに属くか、この神・キリストに属くか」

その自由だけが残されている。どっちでもご勝手です。ただ、サタンについていたら地獄ゆき。神・キリスト・仏にいたら、天国ゆき。キリストは神の前に平伏して拝跪しながら、サタンに勝ったんですよ。キリストの一騎打はいわゆる自力で勝ったのではない。イエス・キリストは本当に神と一つになって勝ち給うた。

第一は経済問題、第二は宗教問題、第三は政治問題、この三大問題のどれに対しても、イエスはただ神意を立ててのみ勝ち給うた。神に平伏してのみ勝ち給うた。おのれの霊力といったものでサタンに抗したのではなかった。これが極めて大切な態度であります。

皆さんは

「自分が霊的にどうだこうだ」

なんて、そんなことはない。キリストの前に本当に平伏せば、それが本当の霊の世界なんです。だから、いわゆる霊的なカリスマ的な能力のある人を、

「あつちのほうに信仰が上だ」

なんて思う必要はひとつもない。「賜物たまもの」というのは、人によって違うんだから。聖霊は一つ。賜物はいろいろです。聖霊の世界はキリストが在り給うという在り方です。キリストはまた、賜物だって、もの凄い素晴らしい賜物をたくさん頂いているひとですけれども。問題は「カリスマ」であつて、「カリスマ」ではない。「カリス」というのは聖霊の「恵み」のこと。「カリスマ」というのは霊的な力、「賜物」のことです。

もし、イエスが聖霊の力を私して、サタンと霊的な闘いをしたら、イエス自身がサタンのようになるし、イエスは必ずしも勝てない。それはイエスの敗北となる。イエスの宗教はいわゆる霊力宗教ではありません。み霊の事態をも私せず、ただ神に平伏し、神におのれを全托し、神と一如となる心境、無即無限無量、この無的実存こそがイエスの在り方であり、イエスの宗教的な実存である。この無力にこそ即ち無限力があつて、神の意思が働くから、サタンはこれにはかなわない。サタンはキリストを相手にしていると思つたら、実は神さまを相手にしていた。神さまを相手にして勝てるか、というわけです。

●キリストに在って

皆さんも、



「サタンをやつつけよう」

と思つたら、とんでもないですよ。それは

「わが避け所」

というキリストの中に入らなくては。そうしたならば、どんなに弱くても勝ちますから。

「われ弱きときに強し」

とパウロが言ったのは、そのことです。「神・キリスト・我」の三重丸です。一筆書きの三重丸。そして、この三重丸の中に芯が、核が、靈核がある。それは聖霊です。

ここにサタンは一番サタンらしい問いを持つてきて、政治問題もちだした。だから、政治にやつきになっていいる青年たちはみなサタンの術中にはまってしまう。あなた方は、それだけの権威をもって、「ノンポリ」でいいんだよ、ノンポリを誇りとしなくては。

「ノンポリではなくて、我々は超、ポリの人間だ。そんなポリティックス（政治）なんか超えている世界だ。何をぬかすか」

というだけの気魄をもっていなければダメですよ。私は生まれつき本当におとなしい、優しいひとなんです。けれども、絶対に、そのようなことには曲げないですから。それは、聖霊が来たら、そういうことになる。これで、イエスが本当に

「神の国は近づけり。汝ら、悔い改めよ、回心せよ。天国はやって来た。福音を受けとれ」

と乗り出す、本当の備えは成りました。完璧に成りました。この曠野の靈闘をやつて、サタンに完勝した。サタンはさすがごと逃げて行つた。そして、

「天使がやって来てキリストに仕えた」

と書いてあるでしょ。

10ここにイエス言い給う『サタンよ、退けしりぞ』主なる汝の神を拜し、ただ之にのみ事つかえ奉るべし』と録されたるなり』ここに悪魔は離れ去り、視よ、御使みつかいたち来り事きたえぬ。

そういうわけで、もうこれ以上、サタンはイエスに手向かう気は完全になくなってしまつたわけです。我々人間だと、まだ問題があるんだよ、イエスの三つの問題よりか。まだ、社会問題というのがあつた。社会問題は何かというのと、モーセの十誡の第六誡以下の、殺人、姦淫、窃盗、偽証、貪婪と、たくさんある。もうしかし、決定的な問題に負けたものだから、社会問題でイエスにサタンは食いついて来なかつた。さつさと逃げて行つてしまつた。我々にはモーセの十誡のいろんなやつがあるから、それで、サタンはこの手かの手でやってくるわけだ。しかし、イエス・キリストに在つて、私たちは躓いても転んでも滑つても、なお勝ちつつ前進して行くことができる。こういうわけでありませう。では終ります。

